

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530672

研究課題名(和文) 朝鮮学校における「民族」の形成・継承・変容のメカニズム

研究課題名(英文) What It means to Learn at Chosen(Korean) School in Japan

研究代表者

山本 かほり (YAMAMOTO, KAORI)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：30295571

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：愛知朝鮮中高級学校での参与観察および学生、卒業生、教員、保護者へのインタビュー調査、行事への参加などを通じて、朝鮮学校での日常およびその意味を考察してきた。さらに朝鮮民主主義人民共和国への「修学旅行」にも同行調査を行い、朝鮮学校の生徒たちにとっての祖国の意味を考察した。朝鮮学校が当事者にとってもつ意味は、朝鮮人としての肯定的アイデンティティを形成し、日本においても朝鮮人として生きていくことの自己肯定感の育成、そして、朝鮮半島を「祖国」として考えつつ、日本において何ができるかを考える遠隔地ナショナリズムが育成されていることを考察した。

研究成果の概要(英文)：Simply considered pro-DPRK schools today, Choson (Korean) schools in Japan originated as non-partisan Korean-language schools for all Korean minorities in Japan in 1945, immediately after the liberation of the Korean peninsula from Japanese colonialism. After years of assimilationist colonial policies, the aim of these schools was to teach Korean language and culture to Korean children remaining in Japan.

Despite these difficulties, students at Choson schools remain optimistic. And parents who want their children to grow up “Korean” continue to support Choson schools. Based on my own participant observation at the Aichi Choson School since 2011, I explore what is behind students’ and parents’ motivations in supporting Choson schools, and what the Korean “homeland” means to them in light of widespread aversion of the DPRK in Japanese society

研究分野：民族関係の社会学

キーワード：在日朝鮮人 朝鮮学校 エスニシティ 民族

#### 1. 研究開始当初の背景

在日コリアンの多様化という現実の中、多様化の具体的な様相が研究成果として発表されてきた。そうした中で、もっとも「本質主義的」な民族性を追求していると考えられがちな朝鮮学校の生徒たちの実際はどうか、世代を経る中で、教育内容も変化し、そこに関わる人たちの意識も変化してきている。まずは、「謎」「ペールにつつまれた」と表現されがちな朝鮮学校の実態を描くことを目的としている。

#### 2. 研究の目的

朝鮮学校に関わる教員、保護者、卒業生、生徒たちが朝鮮学校での教育、生活を通じて継承、獲得、変容するエスニシティと民族関係の様相を描くことを目的としている。これまでの「朝鮮民主主義人民共和国の海外公民」としての自覚の育成という「公式見解」をこえて、朝鮮学校がそこに通う生徒たちに何を継承しようとしているのかを分析することを目的とした。

#### 3. 研究の方法

(1) 卒業生、保護者、在学生、教員へのインタビュー調査

(2) 愛知朝鮮中高級学校を中心とする学校での参与観察

(3) 朝鮮民主主義人民共和国への〈祖国訪問〉同行参与観察

を行うことによって、目的を達成する。

#### 4. 研究成果

全体として朝鮮学校が当事者にとってもつ意味が明らかになり、日常的な参与観察をすることを通じて、インタビューだけでは決して理解できなかったことを理解できるようになった。また、〈祖国〉とする朝鮮民主主義人民共和国との距離、愛着についても理解が深まった。

(1) 研究に着手した頃は、朝鮮学校に対して日本社会からのまなざしが厳しく、また、各種学校認可のため、経歴上も社会的な不利益を被りがちな朝鮮学校を選択するには、保護者たちには強い決意があるのだらうと予想していた。しかし、多くの保護者は朝鮮学校出身者であり、自身の経験から、子どもたちにも同じようにのびのびと朝鮮人として育てほしいという願いをもち、「当たり前」の選択として朝鮮学校を選択していることがわかった。つまりは、多くの日本人が地域の小学校に進学することと同じように、朝鮮学校を選択していることがわかった。

(2) なにがそうさせるのか？朝鮮学校では生徒たちを「朝鮮人にしていく」様々な営みがある。朝鮮語、朝鮮地理、朝鮮歴史、現代朝鮮史など「民族科目」を基盤にしつつ、生徒たちが「祖国＝朝鮮」の一員なのだという意識をもたせていく。朝鮮語ができるようになるという自信に加え、朝鮮の音楽や舞踊にふれ、日常的に朝鮮人に囲まれて成長していく経験は生徒たちに肯定的なアイデンティティを培っていく。とかく日本社会では「朝

鮮人であること」は否定的な要素になりがちであるのに対して、朝鮮学校内では決して否定されない空間であり、そこで生徒たちは「解放」されたように育っていく、そのような空間に自分の子どもを入れたいと考えているのである。

#### (2) 朝鮮民主主義人民共和国との関係

朝鮮学校を批判する立場は、朝鮮民主主義人民共和国と朝鮮学校が密接な関係を持つことを強く批判する。また、反対に朝鮮学校を擁護する言説には必ずといって、朝鮮民主主義人民共和国との関係が希薄化していること、保護者たちが必ずしも朝鮮民主主義人民共和国の支持者でないことを強調、それにあわせて教育内容も大きく変化していることを主張し、朝鮮学校の「弁護」をする。もちろん、それは決して誤認ではない。1970年代から1980年代の教育内容と現在の教育を比較すると、いわゆる「思想教育」的な側面は薄れている。朝鮮の社会主義革命の歴史を教える科目は初中級学校段階ではほとんどない。高校になってはじめて、体系的に扱うようになっていく。象徴とされる朝鮮民主主義人民共和国の指導者の肖像画も、今は高校の教室のみにある。そして、保護者たちも朝鮮民主主義人民共和国に対する批判も含めて、様々な意見を持ち、また、その距離も様々である。

しかしながら、それでも〈祖国〉とする朝鮮民主主義人民共和国への愛着は個々人の語りで見られるのである。その態度を理解するのは、現在日本社会に広がる〈北朝鮮〉バッシングの風潮の中では理解するのは困難である。なぜなのか？かれらは朝鮮民主主義人民共和国に対してどのような感情をもつのか、そのプロセスはどのようなものであるか？それを明らかにするために、3回の予備訪問を経て、2013年、2014年に愛知朝鮮高校の朝鮮民主主義人民共和国への〈祖国訪問〉(修学旅行)に同行調査を行った。ほぼ全部のプログラムに同行し、2014年には宿泊ホテルも同じところだったので、参与観察は非常にうまくいった。朝鮮での2週間のプログラムを通じて、生徒たちは多くの参観をし、また、多くのことを学ぶ。それを通じて、これまで学校で学んできたことを実際に確認する機会としている。また、同時に生徒たちは日本の報道の影響も大きく受けている。したがって、朝鮮民主主義人民共和国に対するイメージは決して肯定的なものばかりではない。「実際はどうなんだろう」と考えていたという。しかし、実際に訪問することを通じて、自分の目、耳、肌で感じる朝鮮民主主義人民共和国での日常を体験する中で、生徒たちなりに朝鮮観を整理するようである。ある意味、訪問中のプログラムは「プロパガンダ」的な要素もあるが、生徒たちはそれをそのまま受け入れるのではなく、自分たちなりに再解釈をしていることが、現地および日本に戻ってからの語りでも読み取ることができる。また、同時に、「朝鮮では解放された気

持ちになった」と語る。かれらが初めて訪問する朝鮮民主主義人民共和国に親近感、愛着を感じるの、日本ではとくくネガティブな存在、つまりは、日本の歴史の負の遺産でしかない在日朝鮮人としての立場から解放され、たどたどしい朝鮮語でも現地の人と直接話し、そして、歓迎されるムードの中で2週間を過ごすことがかれらにのびやかな気持ちをもたらすようだ。「自分を説明する必要がない」2週間はかれらにとっては非常に気持ちが楽な時となるようだ。

朝鮮学校で多くの時間を過ごし、ヘイトスピーチなどの問題はあるにしろ、以前のように露骨な差別表現に直接的に出会うことが少ないかれらでも、日本で自分の存在を説明することが面倒だと感じているという。その「面倒さ」から解放された時間と<祖国訪問>をとらえ、朝鮮を<祖国>と位置づけるようになると考えられる。

もちろん、日本生まれ、日本育ちの生徒たちにとって、朝鮮での経験は「異なるもの」としてうつることも多いようだ。したがって、かれらは「自分たちの経験した朝鮮は限定されている」という認識を明らかにもっていることは明らかである。

かれらが朝鮮民主主義人民共和国に対して抱く感情は決して一枚岩でなく、また平面的なものではない。その重層性をさらに詳細に分析し、記述することが必要だと考えている。

(3)「抵抗のシンボル」としての民族性  
朝鮮学校の成立をみても、それは、植民地支配に抗するものであった。解放後、日本にいた朝鮮人に朝鮮語や朝鮮の文化、歴史を教えるために全国に雨後の竹の子のようにできた私塾「国語講習所」がその起源であるからだ。その後も日本政府やGHQの政策に翻弄され、閉鎖もされながら、これまで70年の歴史をもっている。朝鮮学校で学ぶこと、それはすなわち「朝鮮人になること」を意味している。もちろん、「朝鮮人として」生まれたのではあるが、すでに在日4世、5世が誕生している現在、朝鮮学校以外に普通教育として朝鮮語を含む「民族的」なことを教える学校は、関東と関西を除いては存在しない。

「同化してしまう」と当事者たちは言う。自分たちが日本に存在する理由を考えると、決して「同化」してはいけないという論理を朝鮮学校は持っている。したがって、1世、2世が建て、守りぬいた学校を継続して守り、そして、朝鮮人として生きていく力を身につけることが朝鮮学校の意味だとしているようである。その論理には硬直したものも見られるが、逆に硬直化させないと、日本社会にのまれ、自分たちの「尊厳」は守ることができないと考えていることがわかった。単純に「民族主義者」「本質主義者」という言葉では「批判」「批評」できない、在日朝鮮人たちが日本社会でおかれている現状があり、あわせて、それを分析しつつ、朝鮮学校の差

存在意味を考える必要があると考えている。今後、朝鮮学校における<祖国>と<民族>という問題は、本研究をベースに拡大発展させていく必要があると考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

山本かほり「朝鮮学校における民族の形成と変容のプロセス」(『教育福祉論集』第61号, 2013年 pp141-161)

山本かほり「朝鮮学校で学ぶということ」(『移民政策研究』第6号, 2014年, PP74-91)

山本かほり「朝鮮学校研究のフィールドワークから」(『ソシオロジ』179号, 2014年, pp85-91)

〔学会発表〕(計 3件)

山本かほり「朝鮮学校における民族の形成と変容のプロセス」(日本社会学会大会 2012年11月3日 於 札幌学院大学)

山本かほり「朝鮮学校で学ぶということ」(移民政策学会シンポジウム 2013年5月 甲南大学)

YAMAMOTO, Kaori What It Means to Learn at Choson School” (NZ Asian Studies Conference, 2013年11月 Auckland University)

〔図書〕(計 1件)

山本かほり「朝鮮学校と<北朝鮮>ばっしんぐ」(平田雅巳, 菊池夏野編『ナゴヤピースストーリーズ』2015年出版予定。印刷中)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

山本かほり (YAMAMOTO, Kaori )

愛知県立大学教育福祉学部教授

研究者番号：30295571

(2)研究分担者

野入直美 (NOIRI, Naomi )

琉球大学法文学部准教授

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：